

転移と逆転移について

氏 原 寛

On Transference and Counter-transference

Hiroshi UJIHARA

1. はじめに

最近、いつの間にか若い臨床家に対して物を言うことが多くなってきている。こちらが今まで身につけたものを伝えたい、という気持ちがなくもないのだが、まだまだ精進してこれから、という気持ちの方が強いので、少しわり切れない感じがある。カウンセリングという仕事は、結局クライアントをどれだけ理解できるか、にかかっていると思うのだが、そのクライアント理解は、カウンセラーがどれだけ自分自身について分っているのか、と分ちがたく結びついている。今、私はこの原稿をチューリッヒで書いているが、それはここで教育分析を受けているためである。教育分析について詳しく説明することはできないけれども、要するにカウンセラー自身がクライアントになって、いろいろと自分のことを考える訓練である。それで何が分るのかは、別の機会に書いてきたことでもあるし、ここでこれ以上述べることはしない。しかし意外に、なるほどといった実感の薄い分り方であることは、私個人の経験については言える。

プライヴェートなことは当然書けないけれども、相当辛い思いもして、一夏チューリッヒで分析を受けるだけの意味はあるのであろう。それもこれも、いくつ年をとっても自分のことは分らない、逆に言えば、まだまだ分ってゆく余地が残っている、ということなのであろう。まだまだ中途半端なものなのだが、若い頃思っていたよりは、だから多分今の若い人たちよりは、少し自分について見えてきた所もあるか、とは感じている。そしてそれを伝えたい。一つには、この程度のことをさえまだ知らぬ若い(?) 臨床心理士がいる、という驚きとも悲しみともつかぬ歎きである。もう一つは、心理臨床家養成のプログラムが遅々として進まぬことへの焦りである。心理臨床学会が15年前に発足したことについてはいくつかの理由があるが、何よりも、心理学を勉強し一応の訓練を受けた者たちの、余りにも低い待遇を何とか向上させたい、というのが一番のものではなかったろうか。

それにはいくつかの理由が重なっていて、だからこそ心理臨床士資格認定協会の仕事がある程度進みながらもいくつかのネックに阻まれている。その最大のものが、私個人の印象では、個々の臨床心理士の実力不足である。これは今まで、制度的にも余り期待できることではなかった。現在でも、心理士の立場が向上し、実践にしる経験にしる、資格取得後一層の展望が開かれている、などとはとても思えない。だからこそ、今こそわれわれが逆境に耐えながら、われわれの力を周囲の誰しものが、たとえば親、教師、医師、ケースワ

カーが、それに当の本人が、認めるほどのレベルにまでひき上げる努力がいる。その努力が、若い人たちの間で、若い医師たちと比べるとまだまだ不足しているのではないか、というこれも個人的な印象が私にはある。

もともとは医師と変わらない専門的な職業資格を、ということであつたはずである。そして現状とか将来性も含めて、心理士たちが医師たちと格段に不利な条件に喘いでいるのも確かである。しかし現時点に関する限り、医師と心理士との実力上の格差は蔽うべくもない。だからすぐさま同格の専門家としてというのは無理があるし、現状に沿わない。しかしこの差は詰められねばならない。そしてそのためには、臨床心理士の側の必死の努力が不可欠なのである。にもかかわらず、現状では若い医師たちの方が、若い心理士たちよりも遙かに勉強しているのではないか。現段階で条件のよしあしを言ってみても始まらない。かなりの悪条件に耐えつつ医師に劣らぬだけの努力をつみ重ねることなしに、両者のギャップを埋めることは考えられない。

とくに私が近頃やや悲観的になっているのは、いわば教授クラスの指導者レベルの人たちが、あまりにも一匹狼的状况に狎れすぎているのではないか、ということである。研究も積み経験もある。若い人たちの経験していないことを一杯知っている。それでお山の大将の発言をくり返しているうちに、一種の教祖的な存在になり下る。同格もしくはそれ以上の研究者のいる場を避ける。曾て注目していた中堅以上の臨床家で、10年1日のごとく同じことをくり返している人をなしとはいえない。

中堅についても似たようなことが言える。あちこちの講習会の講師として招かれることが多く、“先生”として“学生”であることを見失ってしまうのである。その程度の知識や経験をすら必要としている数多くの受講生のいることは、ある意味で有難いことである。しかし、その人たちの実際の期待に応えうるだけの知識と経験を身につけた中堅臨床家の数は、意外と少ないのではないか。ここでも同年輩の医師たちと比べてほしいものである。

だから、もともと距離の開いていた医師と心理士の実力、訓練、責任感の差をつめるはずの動きが、かえってその差の大きさをあらためて思わざるをえない皮肉な結果、につながりつつあるといってもいい面がある。

もちろんこれは、心理士に対する医師も含めた世間一般の期待が高まり、いやおうなく臨床の現場で専門を異にするもの同士として接触するチャンスが増え、そのため意外にやれると面目を施したり、やっぱりこの程度かと馬脚を表す機会が増えたからであろう。だから喜ばしい経過の過渡的現象の一つといえなくはない。しかし、最近比較的多く若い医師と接触する機会をもち、心理士の場合とは違った手応えを感じて、一種の危機意識をもったのも事実である。真摯に、かつ地味に、ひたすら孤剣を磨いている心理士の方には言わずものがなのことと思いつつ、大多数の心理士の方にぜひ心にとどめておいていただきたく、あえて書いておいた。

2. 転移と逆転移

さて、本論のテーマは転移と逆転移である。これは、われわれ臨床心理士も、ようやくこうしたテーマでおのれの臨床を考えられる時期が来た、という認識を含んでいる。このことばが、もともと精神分析学の流れから出ていることはいうまでもない。したがってわ

が国でも精神分析学になじみの深い人たち——医師が多い——は、以前からわりにこのことばを使っていた。そうしてそういう人たちの影響力が大きくなるにつれて、精神分析学以外の領域でもこのことばを使う人が増えてきている。これはある程度当然で、細かい点に目をつぶれば、精神分析家もカウンセラーも、心理学的につまずいた人たちに心理学的に働きかけて何とかお役に立ちたい、ということでは同じ仕事をしているのだから、日々の臨床でおそらく同じ現象にしばしば出会っているのである。それをどう考え、どう対応するか、そして何よりも専門家同士のお互いのコミュニケーションのために、それを客観的なことばでいい表わす努力のなされるのは当然の成行きであった。そしてこの転移・逆転移ということばは、使ってみると実に便利なことばなのである。

人間関係には特異的な面と非特異的な面がある。非特異的な面とは、かつてカウンセリングマインドということばがはやり、あらゆる人間関係のよきもあしきも、カウンセリングマインドがどれだけ生かされているかどうかで決まる、といわれたような、そういう面である。親子関係であれ夫婦関係であれ教師生徒関係であれ、あるいは行きずりのよそ者同士の関係であっても、そこにはおのずから“人間同士”としての親しみがあろう。犬に対する場合、虫に対する場合、木や花に対する場合、石ころに対する場合とは違う、人間が人間に出会った時にしか生じない、おそらくは生物学的な基盤を有するであろう人間同士のなじみ感である。

これがたとえば夫婦関係とか友人関係になると、根本にそうした非特異的なものを踏まえながら、関係はたちまち夫婦ならではの、または友人ならではの特異なものに変わる。以前授業中にある同僚について、先生はあの先生と仲が良いのですか？ という質問を受けて、仲のよい恋人・仲のよい親子・仲のよい同僚など仲のよさにもいろいろあり、“仲のよさ”ということでは共通のものを含みながらそれぞれ異っていること、これが同じになれば大変な場合のありうることを説明したことがある。当然カウンセリング関係にはまさしくカウンセリング関係ならではの特異的な面があり、そのことの吟味の怠られてきたことが、今日カウンセラーがなかなか専門家の仕事として認められにくいことについては、前にかなりつつこんで考えたことがある（氏原 1995）。

ところで転移・逆転移についても、似たようなことが起っているのである。精神分析学にも各派があり、大方での合意はなり立っているにしろ、細かい点では技法にしろ理論にしろずい分のくい違いがある。ただ議論がどうしても非特異的な面に及ぶと、各派の、ひいては精神分析学全体の特異性までがばやけてしまう。それとの絡まりで、精神分析学以外のカウンセラーの学派まで、自分たちのやっていることを精神分析学の目指すところと同じではないか、と考えこみやすい。これはとくに、最近のわが国の心理臨床の世界で目立っている現象ではないか、という気がしている。

心理治療の特異性を強調すべきか非特異性を強調すべきかは、単純化すれば好みの問題にすぎない。おそらく創始者の個性が大巾に与っている。どちらか一方がよくて一方が悪いというものでは決してない。だから心理治療である以上、オーバーにいえばあらゆる人間関係に、この両面がつかまとう。そもそも人間関係がそんなものだからである——これについては後でもう少し詳しく触れることになる——。

ただし非特異性があまりに強調されると、各派の独自の性格が薄れるだけでなく、かつてのカウンセリングマインド騒動のように、ある種のやり方ないしあり方だけが絶対で、

他の方法は一切無益あるいは有害でさえあるという単純な論法がまかり通る。これは人間心理のいわば複合性を見失った暴論と言わねばならない。かつてロゴセラピーの創始者であるフランクルが、うつ症状を心理療法だけで治そうとすることの無謀さを批難したことがある（フランクル 1996）が、当然のことである。薬物だけで一切の精神症状がとれるわけではないにしろ、そのことの効用と限界について相当の認識をもつことなしに、心理治療、それも特定なやり方に固執することは有害な場合の方が多い、と思われる。

本論を執筆する気になった一つは、心理治療にはさまざまな局面があり、それに応じて対応の仕方が変わってくることを、ただ一つのやり方にこだわることはむしろ専門家としてとるべき態度ではないことを、同じ心理臨床家としてむしろ忸怩たる思いを抱えながら、比較的経験の浅い心理士の方たちに聞いておいてもらいたい、ということである。

3. 告白 (Bekanntnis, confession) または浄化 (Katharsis)

きっかけは、比較的古い短い論文である (Jung 1929)。古い翻訳があるが、わが国ではあまり注目されていないようである。ただしユング派のロンドンスクールでは以前から関心を集めており、引用されることが多い。それによれば、ユングは心理治療を四つの段階に分け、それぞれの段階に応じて用いる技法の異なるべきことを説いている。ユングについては、転移を望ましくないと考えていた、という説（多分「分析心理学」による）と、転移こそ心理治療のアルファでありオメガと信じていたという説（おそらくは「自伝」か）がある。しかし、ユングが転移の必然性と重要性に十分気づいていたことは、その「転移の心理学」(1994) に明らかである。執筆年代に差があり、彼の思索の深まりと共に考え方が変わった、ということもできるが、この小論を見る限り、ずい分早くから転移（ともちろん逆転移）の効用と限界について、相当深い体験と思索を重ねていたのは明らかである。

ただし以下に述べることは、ユングのこの論文の紹介ではない。たまたまユングの分けた四つの段階と、私の考えているカウンセリングの四つの側面に、それぞれ対応する所があると思われる、現時点においてカウンセリングについて私の考えていることを、ユングの枠組を採用して（例によって私なりに、である。ユング自身の考えに興味のある方は原著によっていただきたい）整理しておこう、とするものである。

ユングは精神療法の段階を四つに分けている。すなわち告白、説明 (Erklärung, elucidation)、教育 (Erziehung, education)、変容 (Verwandlung, transformation) である。私自身は、これらのことは心理療法のあらゆる局面に並行的に生じていると考えているが、便宜上、段階的に見てよい節があるとは思っている。

ところでユングによれば、多くのクライエントは、この告白ないしカタルシスの段階でかなりよくなってしまふ。これは当然のこと、われわれの生活がホンネとタテマエの使い分けからなっている以上、しばしばホンネが鬱屈して抑えこまれてしまふ。これを誰かに聞いてもらうことは、それで現実の問題が解決されるわけではないにしろ、かなりの程度気が休まるのである。たとえばサリヴァン (1986) は思春期におけるチャムの重要性について述べているが、今までもっぱら尊敬の対象であった父親がどうもうさん臭く感じられ、そのように感じる自分に罪悪感めいたものを感じている少年が、同年齢群の少年に、お前もか、実は俺もそうなんだよ、と言ってもらうだけでずい分気が楽になる。これから

おとなの男同士として父親とのつき合い方をまさぐってゆくその時期の、誰しにも当然の不安がこうした愚痴の形で始末されることは、意外に多い。

Bekanntniss というのは、本来司祭に対する罪の告白である。おのれの影を自ら認めることによって神の赦しを乞う。そこまでいわずともいわゆるカタルシス効果、たまりにたまった鬱憤をぶちまけ受けとめてもらうだけでも、今まで抑えていた部分がその分統合されるという意味で、心理治療的に役立つのである。ただし本稿では、それに加えて二つの点を強調しておきたい。

一つは、わが国でよく言われるロジャーズ流の受容である。ひたすらクライアントの言うことを受け容れる、質問をしてはいけない、カウンセラーの意見を言うなどもってのほか、カウンセラーはクライアントのことばをくり返し感情の明確化に徹する、というあのやり方である。これには実践的に深い意味がある。しかしすぐれた実践家にしばしば見られるように、ロジャーズの理論にはかなり不備なところがある（これについては今まで再三指摘してきた、氏原 1974, 1975, 1985など）。感情だけをとり上げて、そこには明確な部分と曖昧な部分とが錯綜しており、それが全体として一つの纏った情緒的な場ともいうべきものを形作っている。だからクライアントがことばで表現する感情は、つねにその一面、比較的意識に近い所、烈しいけれども浅い部分である。そのことばをおうむ返しにくり返しても感情に応えたことにはならないし、もちろん受容したことにもならない。感情ないし関係の何を深いとし浅いとするかは今は問わない。ただロジャーズの理論と技法が導入された当時、私をも含めた日本のロジェリアンのほとんどは、ひたすらことばのレベルの応答に縛られていたと思う。そのためカウンセラーの個性、自然な心の動きは殆ど閉ざされ、クライアントからみれば、カウンセラーの善意のごときものはある程度感じとれるにしても、いわゆる人間同士としての相互交流には程遠い所に立たされていたのではないか。逆に、ことばで把握したレベルを強調されて、全体としての感情の場を混乱させられる場合がなかったとはいえない。だから、ロジャーズの感情の明確化という指示は正しかったのだが、ロジャーズの説明不足と、何よりもわれわれの体験不足が重なって、大きな誤解が生じたのである。

二番目はそれとも関連するが、その程度の実践でも、かなりのクライアントのお役に立ったことである。だからロジャーズの本に書いてあることを金科玉条として踏襲してゆきさえすれば、あらゆるクライアントのお役に立てる、現在それができないのは、自分のロジャーズ的な訓練がまだ不十分なためだ、と思いこみやすかったことである。今日、ある種の方法を万能と思いこんでいる心理治療家はごく一部である。フロイト派のてこずった患者をユング派が一ぺんに治したとか、逆の報告も少なくない。何もしなくても心理治療を受けたのと変わらない“治療的”な効果が生じる、とする報告もある（アイゼンク 1965）。しかし現在なお、こり固まった信念をもつカウンセラーが、わが国においては必ずしも少なくない。そしてそういうカウンセラーの比較的多く働いている機関がある。そういう所へは、当然比較的問題の軽いクライアントたちがやってくる。そしてかなりの程度よくなってゆく。難しい人たちは来ないし来てもすぐ来なくなる。来てもどうにもならないことが分るからである。こういう所で長く働いていると、画一的な、悪い意味でのロジャーズ的やり方で結構自信がつく。ただしそのようなカウンセラーは難しそうなことを言う人のいる場には出たがらない。臨床経験は長いし、結構本は読んでいるので一応のことは喋れる。

先に、お山の大将になりやすい教授クラス、講師先生に崇め奉られて学生的熱意を見失った助教授クラス、について述べた。それと並んで、同格もしくはそれ以上の専門家集団の場で切磋しようとする気持の薄いこのグループの人たちが、わが国の臨床心理士の成長を阻む大きい要因、と私は考えている。

4. 解明 (Erklärung, elucidation)

いずれにしろ、告白だけでかなり治るクライアントが少なくないのである。そして、できれば手間ひまかけず、ちょっとしたお手伝いで元気になってくれるクライアントが多ければ多いほど嬉しい。しかしそれだけでは治らぬ人がある。そこで次の解明に入らざるを得ない。クライアントの問題も違えば、対応する技法もまた異ってくるわけである。

ここでユングは、フロイトによる精神分析が必要になる、という。だから転移・逆転移という複雑な人間関係の中に入りこまねばならない。私自身は精神分析学の専門家ではない。だからここでユングが何を意図していたのか、よく分らない。カウンセラー・クライアント関係の中に生じるさまざまな心の動きの中に、忘れてしまった両親との体験を重ね、いわゆる抑圧された外傷体験を再体験してゆくりしい。大切なのは幼児体験の想起ではなく、いま、ここのカウンセラー・クライアント体験である (たとえばラッカー 1982)。ユングが、転移をなるべくならない方がよい、といったのは、転移・逆転移を否定的に捉えたからではなく、なるべくならば簡単な方法でクライアントに元気を回復してもらうのが一番だからである。助言や忠告やあるいは読書や講演を聴いて、心の癒される思いをした人は少なくない。しかし転移・逆転移的現象は、あらゆる人間関係につきものである。そして精神分析の学派内においても、厳密にこれをどう捉えるかについては各種各様の考え方があつた。それらについての論をつくすだけの余裕も力量も今の私には欠けている。だから本稿では、この問題を共感性ないし主体性の回復という角度から考える。ここでは告白ないしカタルシスが、やや非特異的な面をもつのに対し、少しく特異的な様相が見えてくる。

何年か前の箱庭療学会で、4歳(?)時、母親が目前でレイプされた女性が発症し、あれは母親の問題で自分とは関係ない、と言いつつっていたのだが、ある時、その時その場での怖れ、淋しさ、怒り、恨みその他を再体験し、以後治療がスムーズに進行したというのがあつた(箱庭療学会第4回大会発表論文集)。親の問題は親のことで自分には関係がないとするのは、明らかに一種の合理化である。合理化とは単純化して言えば思考機能の一面であり、対象をおのれとの関わりなしに意識する働きである。しかし好むと好まざるにかかわらず、われわれは対象をおのれとの関係においてしか把握することができない。親の問題は子どもとして、よその親がどうなったかといった同じレベルで客観的に処理できないのである。人間とはそもそも関係の中に生きており、それが人間同士の場合、いやおうなしのエロス性・関係性を完全に切り離すことをできなくしている。しかしおのれの経験——これを大雑把に言えば対象との関わりである——がおのれにとってあまりに受け止めがたい時、われわれはそれをおのれと関係ないものとして処理する。それがいわゆるアレキシシミア(失感情症。誤訳とされている。感情失語症というべきで、感じてはいるのだがそれを表現することばの出ない症状)である。

ここで詳しく触れることはできないが、われわれは対象との関係なしに生きることができない。後に述べるように、そこに一種の融合体験が生じる。その一種没我に近い体験を、すっかりは失われていない主体の体験するのが、よきにつけ悪しきにつけいわゆる超越体験である。ユング派のいうヌミノーズ体験がこれに当る。

感情体験とは、この対象との一体感を踏まえて自我の経験する意識状態であるから、多かれ少なかれヌミノーズ性を担う。しかもヌミノーズ体験は自我がおのれ以上の心的プロセスを経験するがゆえの意識状態である。これは対象との融合体験なしには生じえないことであるから、主体を超えた文字通り超越体験がつきものである。しかし主体性は失われていない。超越体験を主体が受けとめているからである。だからこそ、畏れ、^{おのれの}戦き、喜び、悲しみが必然的に伴う。

いわゆるノイローゼと呼ばれている人々は、こうしたおのれの体験を、おのれのものとしてひき受けることを極端に避けている人たちである。解明の段階でカウンセラーがクライアントに期待するのはそのレベルである。それは、人間はこういう場合こんな風に感ずるものだが、あなたはその時そんな風に感じなかったのか、という問い返しにつながる。さらに言えば、もし私があなたと同じ状況にあれば多分こんな風に感じるはずだが、あなたはどうかであったのかという、いわばカウンセラーの感性を通してのクライアントへの詰問-対決なのである。それがしばしば幼児体験とつながっていることがある。ユングがこの段階を、フロイトの精神分析技法の有効な段階としたのを、私はそのように理解したく思っている。

5. 教育 (Erziehung, education)

ここでユングの言うのがアードラー風の教育である。しかし私には、ここにも4の解明と同じくかなりの単純化があると思われる。アードラーの方法には忠告や助言がかなり入りこむのだが、要は、クライアントが現実処理にいかにか不適切な行動をとっているか、に気づかせることである。私はこの時期を、現実適応の段階と呼んでいる。つまり解明の段階で、大抵のクライアントは自分がいかにか傷ついているかに気づく。先の少女の例でいえば、あれは他者である母親の問題であった。しかし4歳の少女が、母親に起ったことを自分とまったく無関係のこととしてうけとめられるはずがない。だからオーバーにいえば、母親に起ったことはそのまま少女に起ったことであった。少なくとも、母親と重なって生きていた部分は重篤な傷害を蒙ったはずである。それをあえて自分のものとししない。だからそれを自分の体験として思い出した時、少女はその体験を“主体”としてうけとめたことになる。

従来、共感性の回復が叫ばれながら、それがどのように治療と関わるのかについての説明が十分でなかった。しかし私は、共感性の回復はそのまま主体性の回復につながるものと考えている。関係性ないしエロス性が、どこか融合的な側面(主体喪失)を含みながら、だからこそ治療的な意味をもつのは、主体が客体と分離しているからに他ならない。

ところで抑圧にしろ分裂にしろ、主体がそれをおのれのものとしたがらないのは、それが辛いからである。満たされないおのれの願望がいかにか傷つけられてきたかを思えば、もろに人に関わることを避けて、もっぱら機能的に、私流に言えば道具的な人間関係に閉じ

こもればすむ。そもそも期待さえしなければ裏切られることはないからである。それで心を閉ざしているクライアントが何人もいる。ユングのいうように、あるいは以前私が述べたように（氏原1985）、共感性に目覚めたからといって問題が片づくわけでは決してない。共感とは人と人との感じあいである。それは人間関係という枠があって始めて可能なものである。しかし枠というのは人間関係を支えるためのいわば外枠であって、それなりの社会性がある。だから解明の段階で、今までいかに自分がその感情を押し殺し人と距って生きてきたかに気づいたとしても、それではどう関わってゆけばよいのか分っていない場合がほとんどである。1で「仲がよい」といっても、夫婦、兄弟、友人、同僚、師弟の場合にはそれぞれ微妙な差のあることを述べた。それがここでいう社会的な枠である。

ところがある程度カウンセリングが進み、生きるとは人との関わりに他ならないことに気づいても、それをどのような形で具体化してよいか分らないと、現実場面ではまったくお門違いの関係が期待される。一人の心優しい相手に、母親役、父親役、友人役、恋人役、指導者役などのすべてを期待しやすいのである。当然、はじめは好意的であった相手も、余りの期待の大きさに応えかねて逃げ出すことになる。ここに再現されるのがかつての見捨てられ体験、裏切られ体験である。そこでしがみつけばしがみつくほど突き放されることになる。

教育の段階でカウンセラーの心得るべきことは、このような関係性ないしエロス志向が現実的な枠内で満たされるよう配慮することである。いわゆる転移関係についても、それが現にカウンセラー・クライアントの双方に生じている現実的なものであることを踏まえつつ、カウンセラーはカウンセラーにしかすぎないことを分らせる必要がある。ここで前述の見捨てられ（裏切られ）体験に近いものがクライアントに生じることがあるが、それにどれだけ耐えられるかがカウンセリングの山場になることがある。フロイト派ならば、ここで幼児期体験に重なる解釈が与えられるのであろう。次の小節でも考えるつもりであるが、カウンセリングにつきものの融合体験を、解釈という知的作業を通してつき放して見る所に、フロイト派の特徴があるらしい。ユング派の場合は、融合体験のプロセスをもう少し見てゆくのではないか。ただしその場合、一つの方向性がカウンセラーに見えてることが不可欠である。これが見えていない時、カウンセラーはしばしば不安になる。微妙な問題を含みながら、この不安は、このカウンセラーとこのクライアントとの行ける限界をさし示していることが多いと思う。

そこまでゆかずとも、ここでカウンセラーがクライアントの日常関係に介入する場合も生じる。一見不可解なクライアントの行動の意味について、たとえば家族と話しあう必要が生じることがある。あるいは、ここで何をすべきかについて直接クライアントと相談する場合もありうる。カウンセリングをもっぱらクライアントを受容しその話を聞くだけだ、と思いこんでいるカウンセラーからみれば、まるで日常の人生相談と変わらぬような話し合いが、談笑のうちに“深い”レベルで行われることのあること、を思わねばならない。

6. 変容、または融合 (Verwaudlung, transformation)

人間はおそらく単独では存在しえない存在である。ミツバチやシロアリの社会では、ムレ全体がいわば一つの有機体で、各個体はそれを構成する分子のような働きをしているら

しい。各個体がおのれの使命を“意識”しているとはとても思えないが、お互いが微妙に感応しあうことはできているようである。およそムレを作る動物にはすべてこの種の働きがあって、一見各個体がバラバラに行動しているようにみえて、実はもっと大きい力、おそらく本能ともいふべきものに動かされているのであろう。人間もムレを作る動物だから、その生物的な仕組みの底には似たようなメカニズムが働いているに違いない。早い話、オスはメスを前提として創られ、メスもまた同様である。そして生物の大前提がよき子孫を残すことであるのならば、成熟したオスとメスのあい惹かれるのは、恋愛と呼ぼうと欲情と呼ぼうと、生物としての人間の避けられぬ衝動である。

とくに思春期に目立つ異性への憧れは、おのれの中の満たされぬ部分が他者と出会うことによってはじめて満たされる思いである。この時、内から外に向かうエネルギーが外的対象によってうけ返され、そこではじめてわれわれは“十全の”存在感、さらにいえばおのれを超えた他者との一体感、超越体験を味わうことができる。人間がエロス―関係性に聞かれているとはおそらくそのことである。しかしこの体験は、私があなたに呑みこまれる体験でもある。逆説的には、おのれを失うことによっておのれの存在を確かめる、自我の最も昂揚する体験でもある。あなたでもなければ私でもない、私でもあるしあなたでもある体験、といえようか。内なる動きと外のリズムが連動し重なりあい、そこに一つの「場」ができ上る。私だけでなくあなただけでもない、二人いて始めてできる場が成り立つのである。

私は以前、迂闊なことであるが役者とは自己顕示欲の強い人か、と思っていた。確かにそういう一面はあろう。しかし彼らが芝居をするのは、観客との一体感がこたえられないのである。芝居は観客と一つになって一つの場を作り、一人では経験できないおのれの可能性を体験する場なのではないか。そして、それと同じことがカウンセリング場面でも言えるのではないかと、思っている。このクライアントと出会う時、そのクライアントと会う時にしか具体化されないカウンセラーの可能性が顕れる。だからカウンセリング関係は、クライアントだけが変容する場なのではなくて、カウンセラーもまた変わるのである。ユングのいう一種の化学変化の場であって（ユング 1994）、それは両者の変容の場であり、鏡のような単にクライアントを写し出すだけの場ではないのである。そこにユング派のいう逆転移の意味がある。しかしそれは、時にカウンセラー自身の自我喪失、ひいては自我解体の危険性を含む。ユングが、できれば転移・逆転移関係は起らない方がよい、と言ったゆえんである。その間の経緯をある意味で“具体的に”きわめて象徴のないし抽象的に書いたのが「転移の心理学」（1944）である、と私は考えている。

以前にも書いたことがあるが（氏原 1994）、私はこの問題を、種の衝動と個の状況として捉えるのではないかと、考えている。種の衝動とは、先にも触れたミツバチやシロアリの社会で、一匹一匹の個体はおのれの行動の意味を意識していないけれども、ムレ全体にとっては合目的に行動をとるあの傾向である。個の状況とは、個人がいかにして種の衝動をおのれのおかれた個人的状況（男女、貧富、民族、年齢など）を通して具体化してゆくか、ということである。カウンセリング状況では一旦個の状況が超越（忘却？）される。そこでカウンセラーとクライアントは、オーバーに言えば同じ人間と人間として出会う。当然相手が魅力的な異性であれば惹きつけられあう。年齢差のある男女の場合ならば、父性的母性的息子的娘的感情を触発される。私の理解する限り、精神分析学派の人たちは

このプロセスをここで現実の親子関係に還元する。だからよく言われるように、ここで大切なことは過去の親子関係の想起ではなく、現にカウンセラー・クライアントの間に生じている関係である。それがかつての親子関係に重ねられる。おそらくそれが解釈と呼ばれるものなのであろう。現実のプロセスはそれだけ抽象化され、しかしそのレベルではかなり意識化される。正統な分析療法は週4～5回のペースで会う（この頃は減少の傾向があるというし、わが国ではその意味での“正統な”分析はあまり行われていない、と聞いたことがある）。連日、こうした関係を続けてゆけば、多くの場合、両者の間に何らかの変化の生じるのは避けがたい。

問題は、そこで生じる逆転移である。これにもいろんな定義があって、それ次第で意味はどうとでもとれる。そこで議論の噛み合わない場合が時に見られる。私はここでは、一応中本（1994）の投影的同一視の定義に従っておく。それは、一方の思いこみが他方にその通りの結果を生ぜしめる、とする幼児的な前論理的魔術的思考である。分析家たちはそのことが起こる、と信じている。しかもそれこそが分析治療の要である、と考えている節がある。本人は否定しているけれどもフロイト派のサールズ（1991）や、ユング派のシュワルツ・サラント（1995）などの場合、一見共精神的な印象すら与える。しかし、先のミツバチやシロアリのたとえに返れば、こういうことはありうるのではないか。たとえばわれわれが哺乳類の幼獣をみる場合、思わず可愛いと感じてしまうような、あるいはセントバーナードの仔犬が自分よりずっと小さい狆の成獣に甘えるような（ローレンツ 1968）、種として人間同士の間には、ある場合、まさしく前論理的魔術的思考（というべきか？）の通じあうことがあるのではないか。もちろんだからこそ、ここでカウンセラーがカウンセラーとしての個の状況、カウンセリング場面ということでは、場の方向性を見失ってはならない。分析学派の人たちが、そのプロセスを現実の親子関係に還元したがるのはそのせいと思う。

ところでユング派の場合、このわけの分らないプロセスにもう少し長く身を任せる人が多いように思う（まったくの個人的印象である）。それだけに、見たところ何もしない人が多い。本当に何もしていない人も案外いるのではないかと危惧することもある。それでなければ早くからこのプロセスを元型的概念で括ってしまい、フロイト派よりも還元的な方法に頼ってしまう人が、とくにわが国のユング派を称する人の中に散見されるような気がしている。

まったく無責任な言い方をすれば、フロイト派にはしっかりした方法論があり、何とかそれをマスターする程の人ならば、そこそこの仕事はできるのではないか。それに対してユング派は（とくにわが国の場合といった方がよいかもしれない）、かなりの程度名人芸的な直観が要るように思う（フロイト派に不要という意味ではない）。だからそうした直観に恵まれない人は、方向性の見えないままに、フロイト派以前の状態にとどまってしまうのではなからうか。ユング派のロンドンスクールが、一見フロイト派と変わらぬアプローチをとらざるをえなくなったのもそのせいではないか、と思っている。

以上、転移と逆転移の問題を頭に入れながら、心理治療がさまざまな方法論をもち、同じクライアントに対して同じカウンセラーが接する場合でも、状況に応じて多様な局面の生じうることを述べてきた。ユングの小論はそれを段階的なものとして説明しているが、

転移と逆転移について

私自身は、ある面が優勢になることもあれば、同時平行的にいろんな面が現われたり、しばしば逆行する場合さえある、と考えている。

文 献

- アイゼンク, J. (編) (異常行動研究会訳) 1965 行動療法と神経症 みすず書房
フランクフル, V. (宮本忠雄訳) 1966 夜と霧 みすず書房
ヤッフエ, A. (編) (河合他訳) 1972 ユング自伝 I. II みすず書房
Jung, C. G. 1929 Die Probleme der modernen Psychotherapie GW16 57-81 Walter
ユング, C. G. (小川捷之訳) 1976 分析心理学 みすず書房
ユング, C. G. (林道義他訳) 1994 転移の心理学 みすず書房
ローレンツ, K. (小原秀雄訳) 1968 人イヌに会う 至誠堂
中本利征 1994 精神分析技法論 ミネルヴァ書房
ラッカー, H. (坂口信貴訳) 1982 転移と逆転移 岩崎学術出版社
シュワルツ-サラント, N. (小川捷之監訳) 1995 自己愛とその変容 新曜社
サールズ, H. F. (松本他訳) 1991 逆転移 I みすず書房
サリヴァン, H. S. (中井他訳) 1986 精神医学的面接 みすず書房
氏原 寛 1974 臨床心理学入門 創元社
氏原 寛 1975 カウンセリングの実際 創元社
氏原 寛 1985 カウンセリングの実践 誠信書房
氏原 寛 1995 カウンセリングはなぜ効くのか 創元社